

オンラインの関係数がオフラインの対人関係に及ぼす影響

シャイネス・ソーシャルスキル・オフラインの関係数の検討

小林久美子¹ 坂元章¹ 鈴木佳苗¹ 安藤玲子¹ 榎淵めぐみ^{1,2} 木村文香^{1,2}
Kobayashi Kumiko Sakamoto Akira Suzuki Kanae Ando Reiko Kashibuchi Megumi Kimura Fumika

(¹お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)(²日本学術振興会)

キーワード: インターネット, 対人関係, 関係数

問題

近年、インターネットを通じて、見知らぬ他者との関係を持つ者が多くあることが報告されている。例えば、マルチメディア振興センター(2000)は、インターネット使用者のうち、「インターネットだけで会話をする友人がいる」と回答した人が、全体の41%にものぼるということを明らかにしている。また、Parks and Roberts(1998)の調査では、MOOと呼ばれるチャットユーザーの94%が、そこで1人以上の知り合いをみついていることを報告している。このように、インターネットは、今や、我々の対人関係を、容易に拡大させてくれるものとなっている。こうした特質はまた、教育・臨床現場などにおいても注目され、「インターネットで不登校の子をつなぐ」といった実践などにおいて活用されている(小林, 2000)。

そのような実践も含め、インターネットによる関係の拡大は、それがオフラインの対人関係の様々な側面において般化、応用されるなど、望ましい影響があることが期待されていると考えられる。しかし、実際はインターネットの関係拡大がそうした影響を持つか否かについては、今のところ明確でない。とくに、近年行われたKrautら(1998)の研究では、インターネットを介した関係は質が貧しく、そうした関係における相互作用が抑うつや孤独感を高めるなどといった悪影響が示されていることを考慮すると、必ずしも望ましい影響ばかりを期待できないと考えられる。

そこで、本研究は、インターネットを介した対人関係(以下、オンラインの関係)が、オフラインの対人関係に望ましい影響を持つか否かについて検討した。検討内容としては、関係形成の促進・妨害に関わる心理変数への影響と、実際のオフラインの関係数への影響をとりあげた。関係形成を促進する変数としてはソーシャルスキルを、妨害するものとしてシャイネスを扱う。また、関係の種類には、Parks and Roberts(1998)を参考に、同性だけでなく、異性との関係も取り上げ、検討した。

方法

被調査者 首都圏の専門学校生217名(男性201名, 女性16名)。2回の調査に回答したのは、174名(男性159名, 女性15名)であった。本研究では、このうち「インターネットで知り合った人がいますか?」という質問に、「いる」と答えた者46名(男子41名, 女子5名)を対象として行った。

調査時期 1999年12月, 2000年2月

調査内容

・オン/オフラインの関係数 知り合い・友人(同性/異性)・親友(同性/異性)の5種類の関係について、それぞれの数を「いない」から「21人以上」まで8件法で測定した。

・対人関係に関する心理変数 シャイネスは、パス(1991)のシャイネス尺度(9項目)を、ソーシャルスキルは菊池(1988)のKiss-18(18項目)を用いた。

・その他 被調査者の性別、学年について尋ねた。

手続き 調査は、担当教師に依頼し、授業終了後一斉に実施した。回答は、調査終了後、その場で回収した。

結果

オン/オフラインの関係数 オンライン、オフライン双方の関係数について、平均値を算出した(表1)。その結果、オフラインの関係数は、オンラインの関係数より総じて多いことが示され、特に知り合いと同性の友人が、オンラインよりもオフラインに多い傾向にあることが見受けられた。

表1. オンライン・オフラインにおける関係数の平均値

	オンライン	オフライン
知り合い	4.6	6.1
友人(同性)	3.7	6.0
(異性)	2.8	3.8
親友(同性)	1.9	3.2
(異性)	1.4	1.8

オフラインの対人関係変数とオンラインの関係数との相関 オフラインの対人関係に関する変数と、オンラインの関係数について、相関を算出した。その結果、

心理変数については、シャイネス・ソーシャルスキルの双方とも、有意な相関は得られなかった。また、オフラインの関係数については、オンラインおよびオフラインの知り合いというように、オン・オフで関係の種類が同じ組み合わせである場合に、いくつかが有意な正の相関が認められた。

オフラインの対人関係変数とオンラインの関係数との因果関係

次に、オフラインの対人関係に関する変数と、オンラインの関係数との因果関係の推定を行った。分析は、図1のモデルに基づき、共分散構造分析を用いて行った。以下では、図1のモデルのパスについて、有意な効果が得られたもののみについて述べる。

心理変数 まず、シャイネスに関しては、オンラインの関係数からの影響を示すのパス(太線矢印)のうち、同性の親友において有意な負の効果が認められた。これはすなわち、オンラインで同性の親友が増えるほど、シャイネスが低下することを示す。また、シャイネスからオンラインの関係数への影響を示すのパス(破線矢印)については、同性の友達と異性の親友に有意な負の効果が認められた。これは、もともとのシャイネスが低い人ほど、オンラインでの同性の友達や異性の親友が多いことを示すものである。

次に、ソーシャルスキルについて検討したところ、オンラインの関係からスキルへの影響において、同性の親友に関して有意な正の効果が認められた。オンラインで同性の親友が多いほど、後にソーシャルスキルが高まることを示すものである。また、逆の影響においては、異性の友達に有意な正の効果が認められ、スキルが高い人ほど、のちにオンラインで異性の友達が多いということが示された。

オフラインの関係数 オンラインの関係が、オフラインの関係に与える影響に関しては、オンライン、オフラインで関係の種類が同一の組み合わせのものについてのみ着目した。分析の結果、のパスについては有意なものは認められなかったが、では、知り合いにおいて有意な正のパスが認められ、オフラインで知り合いが多い人ほど、オンラインでも知り合いが多くなるという結果が得られた。

考 察

本研究では、オンラインでの関係が、オフラインの対人関係に及ぼす影響について検討した。その主な結果として、オンラインで同性の親友が多くできるほど、スキルが高まり、シャイネスが低下するが、オフラインの関係数には影響を与えないことが示された。この結果は、次の2点において重要であると

指摘できる。まず1点めに、これらの結果が、オンラインの経験の限界を示唆している点である。オンラインでの経験、すなわちそこでの対人相互作用は、シャイネスやスキルなど、対人関係に関わる個人の資質は高めるが、友人数など、現実の適応に関連するような、直接的な影響まではもたらしていない、つまりネットでの経験は、個人の能力には関連するが、現実の状況を変えるまでには至らない、ということである。これは、冒頭で述べた教育・臨床実践の内容範囲を定めるという意味で、意義深いものと思われる。

また、2点目として、この結果が対人訓練の場としてのインターネットの可能性を示唆している点である。インターネットでは、短時間で多くの人と出会い、効率良くコミュニケーションを行うことが可能であるが、今回得られた心理変数への効果は、そのようなインターネットの特性により、ユーザーがオフラインよりも密度の濃い経験を積んだことによって生じたのではないかと考えられる。今後は、そうした効果を生じさせるプロセスを明らかにするなどして、インターネットが対人関係訓練の場として持つ機能を明確にしていくことが望まれる。

以上のほかに、本研究では、扱った被験者数の少なさなど様々な限界も指摘される。今後はそれらを改善しつつ、さらに今回得られた結果が頑健か否かについて検討していく必要があると思われる。

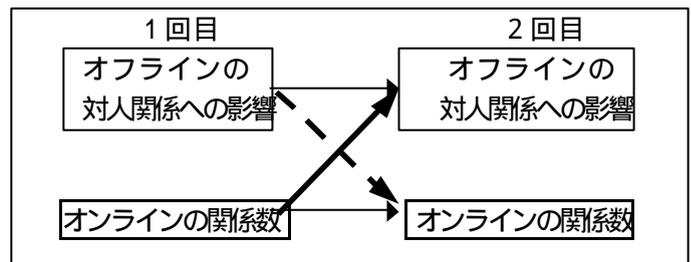


図1. 交差遅れモデル

引用文献

- パス A.H. 大淵憲一(訳)1991 対人行動とパーソナリティ 第2版 北大路書房 (Buss, A.H. 1986 Social behavior and personality. Hillsdale, New Jersey: Erlbaum Associates)
- マルチメディア振興センター(2000) 家族関係・消費・福祉に関わるインターネットの影響及び可能性に関する調査報告書 マルチメディア振興センター
- Parks, M. R. & Roberts, L. D. (1998) Making Moosic: the development of personal relationships on line and a comparison to their off-line counterparts. Journal of Social and Personal Relationships, 15(4), 517-537.
- 小林 久美子(2000) インターネットと社会的不適応 インターネットの心理学 教育・臨床・組織における利用のために 坂元章(編) 学文社 Pp. 122-134.
- Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S, Mukophadhyay, T & Scherlis, W. (1998) Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? American Psychologist, 53, 1017-1031.